

『南山神学』41号（2018年3月）pp. 113-144.

カトリック伝道士・細渕重教とその時代

三好 千春

はじめに

先年、筆者は巡回宣教師であるテストヴィド神父の宣教活動を考察¹した際、西洋人宣教師の働きを支えた日本人伝道士（当時の書き方は「伝導士」）について考える必要に気付いた。伝道士は一般信徒だが、宣教師や日本人司祭と密接に協働し、聖職者と一般信徒の間に位置する中間的存在と言える。これまで、伝道士については、各地のカトリック教会記念誌を中心に断片的に取り上げられ、明治以後の日本カトリック教会史における彼らの働きの重要性が指摘されているものの、管見の限りでは伝道士に関する専論はない²。

そこで、本稿は、日本人伝道士に関する研究の基礎作業の一環として、細渕^{しげのり}重教というカトリック伝道士を取り上げ、彼の生きた軌跡をその時代背景と共に考察する。細渕重教は幕臣の子息として生まれ、いまだキリスト教禁令下の時代に洗礼を受けてカトリック信者となった。そして、20代前半で伝道士として働き始め、後半生は宮城県柴田郡大河原町を中心とする仙南地域での宣教活動と教会活動に身を捧げ、生涯を伝道士として全うしている。

¹ 拙稿「『巡回宣教師』テストヴィド神父の宣教活動」『日本カトリック神学会誌』第25号、2014年参照。

² 一人の伝道士の人生を歴史的背景と共に扱ったものとして、青山玄「明治のカトリック愛知・岐阜県布教」『The Missionary Bulletin』第25巻第4号、1971年、「明治のカトリック愛知・岐阜県布教（2）」同第25巻第5号、1971年、「明治のカトリック愛知・岐阜県布教（3）」同第25巻第8号、1971年、「明治のカトリック愛知・岐阜県布教（4）」同第25巻第9号、1971年がある。しかし、その主題は明治期の岐阜県と愛知県で展開されたカトリックの宣教活動であり、伝道士そのものに焦点をあてたものではない。

細渕重教は伝道士の草分け的存在の一人であり、彼の伝道士としての人生をその時代背景と共に振り返って光をあてることは、伝道士という存在の働きと意義を理解する一助となるであろう。

1. 幕末維新时期における細渕重教—横浜仏学伝習所からラテン学校まで—

1. 1. 誕生から横浜仏学伝習所まで

細渕重教は1852年（嘉永5）8月15日に、浦賀奉行所与力であった細渕新之丞（重礼）³の長男として、浦賀に生まれた。名前は、幼少時から20代半ばまでは「源一郎」を使用し、その後「重教」と改めたようである⁴が、本稿では「細渕重教」の名で統一する。

重教誕生の翌年、アメリカのペリー提督が4隻の黒船を率いて浦賀に来航した。こうして彼は、幼少期から青年期にかけて幕末維新の動乱期を生きることとなった。

1865年（慶応元年）10月、幕府は近代的な陸海軍の創設を目指し、フランス

³ 号は竹山。「浦賀奉行所組与力」であった細渕新之丞の名は、1849年（嘉永2）にイギリス軍艦マリナー号が浦賀に渡航して湾内を測量した事件の「御褒美控え書」に初出し、「銀壺枚 浦賀奉行組与力 細渕新之丞」とある。ついで1853年（嘉永6）のペリー来航関係の御褒美控え書にも、格別の骨折りがあったとして「銀捨枚」が与えられている。また、幕府が建造した洋式軍艦「鳳凰丸」が1854年（安政元年）5月に試験航海を行った際には、小銃などの管理役に任命された（横須賀市編『新横須賀市史 資料編 近世Ⅱ』ぎょうせい、2005年、244、255、270、452、476頁、および西川武臣『浦賀奉行所』有隣堂、2015年、152頁）。さらに、1862年（文久3）の生麦事件後、幕府に圧力をかけるためにイギリス軍艦が横浜に入港し緊張が高まった際には、浦賀の見魚崎台場の「差図役」に任命されている（『浦賀奉行所関係資料第一集 臼井家文書（下巻）』たたら書房、1968年、432頁）。新之丞が登場する最後の史料は、1868年（慶応4）に書かれた浦賀奉行所の与力・同心・足軽に関する回答書で、彼は「現米八捨石高 役料三人扶持」の「地方掛」および「吟味物掛」として記載されている（前掲『新横須賀市』、678頁）。

新之丞の明治以後については不明だが、戸籍から1880年（明治13）の段階で、神奈川県三浦郡浦賀に居住し存命であったことが分かる。なお、晩年に受洗し、洗礼名が「シメオン」であるという口伝があるようだが、真偽不明である。

⁴ 1872年（明治5）の受洗時や、1879年（明治12）に小田原でカトリックの宣教のために届け出をした際の名前は「細渕源一郎」となっている。戸籍によれば、細渕は1880年（明治13）1月26日に分籍して戸主となっているが、その際に名を「重教」としたのではないか。

に依頼して横須賀製鉄所を建設・稼働させ、さらに幕府陸軍を改革するためにフランスから陸軍教師団を呼び寄せた。そのため幕府は、多数のフランス人の来日に備えて早急に通訳の養成と、フランス語を解する士官候補生の育成の必要に迫られた。そこで幕府は、1865年（慶応元年）8月、横浜表に横浜仏学伝習所を創設し、旗本など幕臣の子息から伝習生を選び、フランス語を学ばせることとした。

1867年（慶応3）後半になると、仏語伝習を志願する幕臣（やその子息）も次々と増えた。そこで、同年10月、伝習掛は老中宛に「別紙名前之者共、兼て仏語志願之者ニ付、右為伝習横浜表江被差遣候様仕度」⁵と上申し、37人の名前が記された「仏語伝習相願候者名前書」を提出した。それに対して幕府は、11月16日に4人を除いた33人を認めたが、その33人の中に「細淵源一郎」が含まれていた⁶。こうして、フランス語学習を自ら志願した細淵重教は、横浜仏学伝習所で学ぶこととなった。この時、細淵は数え年で16歳であった。

ところが、徳川幕府の瓦解と明治新政府の成立により、1868年（慶応4）2月頃に仏学伝習所の授業は停止され、同年8月、明治新政府が伝習所を接收した⁷。従って、細淵重教のフランス語学習は初級段階で終わったと推測される。

1. 2. ラテン学校時代

1868年（慶応4）から1871年（明治4）2月までの細淵の動向に関して、確かなことは分からない。細淵重教が彰義隊に加わっていたという話があるが⁸、

⁵ 倉沢剛『幕末教育史の研究 二 一諸術伝習政策一』吉川弘文館、1984年、68頁。

⁶ 「同（引用者注：浦賀奉行組与力）新之丞倅 細淵源一郎（十六）」。同上、69頁。

⁷ 同上、58～59、72頁。

⁸ 「細淵先生長逝 十三日神の國に昇天さる」（新聞名・掲載年月日不明、Sr.細淵ふみ子氏提供）には、「上野彰義隊に加はり（中略）築地の口州公の邸宅に立籠り砲火の間に戦闘せしも時に利あらず。偶々榎本武揚を司令にしてまさに品川沖を出港せんとする幕府艦隊に逃げ込んだが年少の故を以て残念ながら浦賀に送還された」と記されている。また、ご遺族の細淵誠一氏によれば、細淵重教は彰義隊に加わっていたが、上野戦争前に何らかの理由で離脱し、上野で戦っていないという話が伝わっているとのこと。

不明な点が多く、定かではない。

1908年（明治41）作成の細瀧重教自筆の「履歴書」¹⁰は、1871（明治4）年2月に「天主教ニ入門全年四月ヨリ捨弍月迄横濱市居留地八捨番ニ於テ宣教師アンプルス（佛人）ヨリ神学ノ教授ヲ受ク」という記述から始まる。

「履歴書」に登場する「アンプルス」は、パリ外国宣教会の宣教師アルンブリュステ神父を指す。神父は1871年（明治4）4月から横浜の天主堂（横浜居留地80番地）で、長崎出身の神学生たちや石版印刷工たちへの教育の他に、士族出身者たちにも生活費を支給しカトリックの要理やラテン語を教授することを始めていた¹¹。これは内容から予備神学校的なものと思われ、同時期のプロテスタント宣教師たちによる英語（英学）塾（横浜居留地のヘボン塾¹²や築地雑居地域のカロザース塾¹³など）とは趣を異にしている。

細瀧重教が、プロテスタント宣教師の英語塾ではなくフランス人宣教師がいるカトリック教会に行った理由は、彼が経済的苦境にあったため、カトリック教会が生活費を支給した点に魅かれたからであるらしい¹⁴。と同時に、いささか

⁹ 1868年（慶応4）4月5日段階で作成された「彰義隊人名台帳」に細瀧重教の名前はない。山崎有信『彰義隊戦史』隆文館、1904年、74～101頁。

しかし、些少なから食い扶持が出ていたため、武士の次男・三男を中心に4月5日の名簿作成後も隊士は増え続けて、最終的に彰義隊士の数は一千人ほどになった。よって、細瀧重教が4月5日以降に彰義隊に加わった可能性は否定できない。森まゆみ『彰義隊異聞』新潮社、2004年、56、252頁。

¹⁰ 1908年（明治41）4月28日付で宮城県庁に提出された「履歴書」。大河原カトリック教会100周年記念祭実行委員会編『神とともに 100周年記念誌』大河原カトリック教会、1980年、62頁写真版。活字化されたものとしては、仙台白百合学園編『仙台白百合学園歴史資料集 第二編 仙台高等女学校時代』仙台白百合学園、2014年、238～239頁。

¹¹ 青山玄「神田教会百年史」神田教会百年のあゆみ編集委員会編『カトリック神田教会百年のあゆみ』カトリック神田教会、1974年、17頁。

¹² 1863年（文久3）にジェイムズ・カーティス・ヘボン夫人クララが開いた私塾。クララ以外にも宣教師のヘンリ・ルーミスやオリヴァ・M・グリーンが教鞭をとった。著名な出身者としては、林董、高橋是清、益田孝などがいる。中島耕二・辻直人・大西晴樹『長老・改革教会来日宣教師事典』新教出版社、2003、18頁。

¹³ 築地に居を定めたカロザース夫妻のもとに英語の指導を求めて青年たちが集まったことをきっかけとして、1869年（明治2）に開かれた英学塾。出身者には伊澤修二などがいる。同上、63頁。

¹⁴ 前掲新聞記事「細瀧先生長逝」（註8）には、「先生（注：細瀧重教）がカトリック教徒になった抑々の始めが面白い。（中略）頗るの貧乏生活で勉強もロクにやれず困つてゐる

なりとも伝習所でフランス人からフランス語を学んだ経験から、心理的にカトリック教会に接近し易かった可能性も考えられる。

「履歴書」には、続いて「全五年壹月ヨリ同八年参月迄東京麹町区壹番丁羅典学校教師ビーグルス（佛人）ヨリ宗教哲学科ノ教授ヲ受ク」とあり、細渕が1872年（明治5）1月から1875年（明治8）3月まで東京にあったラテン学校で「宗教哲学」を学んだことが記載されている。

この「羅典学校」とは、パリ外国宣教会が1872年（明治5）4月にフランス公使ベルトミーの斡旋で九段濠端一番町（現・千代田区三番町）にあった旧旗本の亀井勇之介の屋敷を借り、そこに青年たちを受け入れて神学生としての神学教育（ラテン語や哲学の教授が主）や、キリスト教要理教育を施した学校のことである。ラテン学校は、漢学部とラテン部（「羅典学校」出身の伝道士・小川昇之進の回想によれば、「漢学舎」と「ラテン神学校」¹⁵⁾）に分かれており、漢学部の学生は宿泊費や飲食費が無料で、中国で書かれた漢文の教理書を学習し、ラテン部の学生は食事・衣服などを支給される神学生たちであった¹⁶⁾。

ラテン学校の校長は当初、横浜に住むアルンブリュステ神父が務め、神父は横浜と東京を往復していたが、ラテン学校にはヴィグルー神父、ミドン神父、ルマレシャル神父などが常住していた¹⁷⁾。そして、学校の神田猿楽町移転後の1874年（明治7）、アルンブリュステ神父がパリにあるパリ外国宣教会大神学校の校長として離日した後、ヴィグルー神父が学校長に就任した。ラテン学校に関係した数人の宣教師の中で、ヴィグルー神父が最も深くラテン学校に関わっており、細渕重教も、主にこのヴィグルー神父（「ビーグルス」）から教えを受けていたと思われる。

細渕重教がいた頃のラテン学校の学生は、旧仙台藩士・藩医や南部（盛岡）

と東京で宗教を宣傳するかたわら食客を置く毛唐があると云ふので其毛唐の食客になつた」とある。

¹⁵⁾ 小川昇之進『道齋・小川昇之進伝道回想録』カトリック気仙沼教会、1970年、1頁。

¹⁶⁾ 青山前掲「神田教会百年史」（註11）、18～19頁。

¹⁷⁾ 築地カトリック教会百周年記念誌編集委員会編『つきじ—献堂百周年記念号』築地カトリック教会、1978年、56頁。

藩士など奥羽越列藩同盟に関わった東北の士族の子弟が多く、最初の2年間にラテン学校聖堂で受洗したのは、大半が彼らであった¹⁸。このラテン学校での東北出身者たちとの深い交わりの体験が、後年、細渕が仙台近郊の地に伝道士として赴くという選択に何らかの影響を及ぼしたかも知れない。なお、このラテン学校で細渕は原敬¹⁹（後の第19代内閣総理大臣）と出会って「親しくなったのですが、原も私も議論ずきでよく床の中に入ってから大聲でかたり、宣教師にしかられ」²⁰たという友情を結んでいる²¹。

ラテン学校に「入学」して一年後の1873年（明治6）2月12日、細渕重教はアンドレアの霊名で受洗した²²。当時、ラテン学校には「異宗徒掛謀者」（キリスト教関係の探索に従事する政府の密偵）が潜入しており、細渕の洗礼は「同（引用者注：二月）十二日五字（ママ）ニ起キ洗礼ノ学語仕候同教ノ者ヲ以テ仮リニ親ヲ立ル（中略）細渕ノ仮父今泉也」²³と報告されている。密偵が生徒の一員として学校に潜入し、人々の動向に目を光らせ詳細を政府に報告していたことは、細渕重教の受洗時は、まだキリスト教禁制の高札が撤去されておらず、配流キリシタンたちの釈放もなされていない時期、つまり名実ともにキリスト

¹⁸ 「ラテン学校」での最初期の受洗者は以下の通りである。1872年（明治5）9月29日、最初に受洗した2人のうち1人は旧仙台藩士（もう一人は不明）、同年11月1日の受洗者3人は全員旧仙台藩士、1873年（明治6）1月6日の受洗者3人は旧仙台藩士2人と旧南部藩士（と推定される）1人、2月12日の受洗者3人のうち2人は旧仙台藩士、1人は細渕重教（旧幕臣子息）、4月16日に受洗した16人中では、旧仙台藩士4人（確認し得た者1人、推定される者3人）、旧南部藩士3人（確認し得た者2人、うち一人が原敬。推定される者1人）、旧幕臣子息1人。

¹⁹ 1872年（明治5）11月頃にラテン学校に「入学」。

²⁰ 「名利を捨てゝ草深い東北へ」『東京日日新聞』1926年6月29日。

²¹ 両者の友情関係はその後も継続したようで、1890年（明治23）頃、農商務大臣陸奥宗光の秘書官を務めていた原敬に対し、当時麻布教会の伝道士だった細渕が子猫をあげたところ、その子猫が原の一張羅に粗相をして原が怒った（同上「名利を捨てゝ草深い東北へ」とか、1916年（大正5）、立憲政友会総裁として原が東北遊説の折には、細渕が伝道士として住んでいた大河原町の駅に汽車を臨時停車させ、駅のホームで細渕と握手をかわし、町の評判となったといった出来事があった。前掲『神とともに』（註10）、66頁。

²² 神田教会洗礼台帳による。彼は14番目に記載されている。

²³ 「壬申拾星録」（早稲田大学古典籍総合データベース）

http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i14/i14_a4154/index.html (2018年1月20日最終アクセス)

教禁制下であったことをまざまざと示している。ただし、キリシタン禁制の高札撤去の通知が出されたのが、彼の受洗から 2 週間足らず後の 1873 年（明治 6）2 月 24 日であり、3 月には浦上信徒たちの釈放が伝達されるという状況ではあった。

細渕の受洗は政府に盾突く行為であったわけだが、彼がどのような思い・考えで洗礼を受けようと決意したのかについては、残念ながら不明である。

受洗から 5 日後の 2 月 17 日、細渕重教は同日にラテン学校で受洗した 7 人のうちの鈴木亦人（旧仙台藩医）および河東田剛（旧仙台藩士）と共に、ラテン語学習のために横浜天主堂に送られた²⁴。ラテン語を学ぶということは司祭になる決断をしたことを意味し、事実、彼はラテン部に所属する神学生となった。それは、1873 年（明治 6）12 月に、司祭になる決心をしてアルンブリュステ神父に申し出た本宿賢郎²⁵がその日のうちに漢学部からラテン部に移された時、ラテン部の会計を担当していたのが細渕重教であったという本宿の回想²⁶や、レゼー神父の回想に、1874 年（明治 7）夏に「拉丁學生」の細渕重教と共に富士登山をした²⁷とあることから裏付けられる。

しかし「履歴書」を見ると、細渕のラテン学校での勉学は 1875 年（明治 8）3 月までとなっており、彼は司祭の道を断念している。この年、日本のパリ外国宣教会は、ラテン学校に示されるような費用のかかる青年宣教から、孤児院などを通しての子供や家族を通しての宣教方法へ方向転換をしており、ラテン

²⁴ 「同十七日河東田鈴木細渕羅甸為修学横濱天主堂差送り申候」。同上。

なお、細渕重教がいつまで横浜に居たのかは不明である。「履歴書」には何も記載されておらず、横浜滞在は短期間に終わったのではなかろうか。

²⁵ 岩手県出身。もと南部藩士か。1873 年（明治 6）8 月 15 日にラテン学校にて受洗。後に神田教会伝道士となる。

²⁶ 本宿賢郎談「東都に於る公教會の揺籃時代」『聲』第 411 号、1910 年、35 頁に「拉丁部の方は衣服から何から凡てお仕給がある。此方の會計は今仙臺に布教して居る細渕重教君で君は却々の手腕家だつたよ」とある。

²⁷ 一老司祭（引用者注：ドルワール・ド・レゼー神父）「老司祭の回想録」『聲』第 440 号、1912 年、15 頁に、「明治七年の暑中休暇の時自分と故のプロテラン師と二人は拉丁學生で十八九歳の青年（今の仙臺教区内金ヶ瀬の細渕傳教士なり）を案内者として富士登山を試みた」とある。

学校への経費は削減され、学校自体も次第に小教区としての性格を強めていった²⁸。

また同年10月、長崎に神学校（長崎公教神学校）が完成すると多くの神学生は長崎に移動し、残った者たちもその去就は各自の自由に任された²⁹。例えば、細渕重教と同時期に神学生としてラテン部に在学していた小川昇之進³⁰は「長崎の神学生（たち）が（長崎へ）帰りし後、学生の中に帰国する者あり、他に職業を求める者あり、小生もまたその一人なりし」³¹と神学生を辞めて仕事を探そうとしているが、同じく神学生として在学していた井上秀齊³²は、あくまで司祭になる意志を持ち、築地教会に移ったヴィグルー神父のもとで神学の勉強を続けている³³。そして細渕重教は、新たに伝道士として働くこと、つまり、一信徒でありつつ、同胞の日本人に対する宣教活動に専念する途を選んだのである。

2. 伝道士としての活動（1）：1876年から1893年の「失踪」まで

2. 1. 新潟

伝道士として細渕重教が最初に赴いた地は、新潟であった³⁴。「履歴書」によ

²⁸ 青山前掲「神田教会百年史」（註11），23～24頁。ラテン学校自体は、1877年（明治10）に閉鎖されたが、それについて小川昇之進は、「神学生は信者の子供でなければ成功しないという理由」からと述べている。前掲『小川昇之進伝道回想録』（註15），18頁。

²⁹ 青山前掲「明治のカトリック愛知・岐阜県布教」（註2），213頁。

³⁰ 1856（安政3）～1941年（昭和16）。仙台藩士の子息。1874年（明治7）2月5日にラテン学校にて受洗。後に仙台の元寺小路教会、山形、盛岡、気仙沼、一関で伝道士を務めた。

³¹ 前掲『小川昇之進伝道回想録』（註15），3頁。

³² 1854（嘉永7）～1942年（昭和17）。岐阜県の蘭方医の子息。1875年（明治8）8月受洗。1882年（明治15），一人息子であることを理由に叙階を断念するよう説得され、帰郷。医業に従事するかたわら、岐阜・愛知県で伝道士として活躍。1889年（明治22）に伝道士を辞して以降は医業に専念した。

³³ 青山前掲「明治のカトリック愛知・岐阜県布教（2）」（註2），273頁。

³⁴ レゼー神父の回想には、神父が新潟に赴く際「自分と同じく何の経験もない二十二三歳の青年を伝導士として相伴ふて出掛けた」とある。この未経験の、神父と共に東京から新潟まで行った22,3歳の青年が細渕重教であると断定はできない。年齢や出発地からすると彼らしく思われるが、「履歴書」に記載された時期と全く合致しないからである。「老司祭の回想録（八）」『聲』第441号，1912年，15頁。なお、青山玄はこの22,3歳の伝道士は「新城信一」としているが、その根拠は不明である。青山玄「新潟教区宣

ると、1876年（明治9）の5月から10月の半年間、彼は新潟市、五泉町、新津町、三条町、そして佐渡国での「兼任布教」に従事している。

当時、新潟の宣教を担当していたのはレゼー神父で、神父は1875年（明治8）10月、エブラール神父の後任として新潟に来た。レゼー神父は新潟市内で宣教を始めてみて、「聴きに來る人の中、新潟市中の人は甚だ少なく、多くは近郷近在の人等」であることに気づき、市内より近郊の地域に力を注ぐ方針を立てた³⁵。細淵重教の活動もその方針に沿って行われたようで、分かっている範囲では、五泉町近在の吉沢村で細淵は「凡そ15日間連夜説教会」を開いている³⁶。

一方、レゼー神父は新潟市内の家を借りるために大変な苦心をした末に、米屋（もしくは洗濯屋³⁷）の渡辺喜平³⁸（喜兵衛とも³⁹）から多門通の家を又貸してもらった⁴⁰。この渡辺は、レゼー神父の前任者エブラール神父にも、片原の八間小路の家を6か月貸した経験⁴¹がある人物であった。

渡辺喜平はこれらが機縁となり、1876年（明治9）6月24日に息子九郎（新潟教会洗礼台帳第5番。霊名トマス）と共にレゼー神父から受洗した（新潟教会洗礼台帳第4番。霊名パウロ）。ほどなく彼の妻イシも受洗し（新潟教会洗礼台帳第30番。霊名アンナ）、さらには彼らの娘のトラ、マリ、ハナも受洗した⁴²。

教小史」新潟カトリック教会編『新潟カトリック教会百年の歩み 聖堂献堂50周年を祝して』、1977年、14頁。

³⁵ 「回想録（九）」『聲』第442号、17頁。

³⁶ この「説教会」には「毎回百何十人位」の聴衆がいたが一人も志願者が出なかった。ところが、会が終了して真夜中に新発田へ帰る途中、3人の男が細淵を待ち伏せて声をかけ、自分たちは15日間説教を聴いたが誠に感心したので、もう少し話を伺いたいが、人目をはばかるのでこんなところで呼び止めた、もう少し話を聞かせてくれと頼んだので、喜んで細淵は応じた、とレゼー神父の回想にある。同上、21頁。

³⁷ レゼー神父の回想では「出入りの洗濯屋の主人」となっている。前掲「老司祭の回想録（八）」（註34）、19頁。渡辺喜平は、外来は米商人で北海道へ米穀を売ったりしていたようである。青山前掲「新潟教区宣教小史」（註34）、13、15頁。

³⁸ 戸籍には「渡辺喜平」と記されている。

³⁹ 青山前掲「新潟教区宣教小史」（註34）、13頁。

⁴⁰ 前掲「老司祭の回想録（八）」（註34）、19頁。

⁴¹ 青山前掲「新潟教区宣教小史」（註34）、13頁。

⁴² Sr. 細淵ふみ子氏の御教示による。

そして、この長女（二女⁴³）トラ（1861年2月2日生。霊名ヘレナ）が細渕重教の伴侶となる。二人の入籍は1877年（明治10）7月2日であった⁴⁴。こうして細渕は同じ信仰を持つ女性と結婚し、ここに成人洗礼でカトリック信者となった日本人夫婦が誕生した。その後二人は、5男5女の合計10人の子供に恵まれ、篤信のカトリック家庭を築いていくことになる。

2. 2. テストヴィド神父との協働：小田原・横浜・横須賀時代

細渕重教は、1878年（明治11）2月から1883年（明治16）5月まで、「神奈川県下足柄郡小田原町ニ於テ布教傳導ニ従事」した。この小田原で細渕と組んだのが、「歩く宣教師」として名高いテストヴィド神父であった。

小田原市は人口20万足らずの中小都市⁴⁵だが、市内にはカトリック、プロテスタント、聖公会、ロシア正教と四つの流れを汲む教会がある。この四つが市内にすべてそろっているのは、政令都市以外では極めて珍しい⁴⁶。この珍しい現象が起こった理由として考えられるのは、小田原の地理的条件である。

明治前期、横浜を中心として設定されていた「遊歩区域」（各開港場とその周囲の最大十里四方の地域。外国人が「旅行免状」なしに自由に遊歩できるとされた）の西の境界線は酒匂川であった。小田原は、その酒匂川を超えた所に位置する城下町で、かつ江戸時代には東海道屈指の宿場町として栄えた町である。この「遊歩区域」外すぐにある城下町兼宿場町という条件が、内地に向かっての宣教活動の拠点として、各教派を小田原に惹きつけた理由ではなかろうか。

⁴³ 戸籍の記載は「二女」であるが、細渕家ご遺族の中では「長女」と伝わっている。長女は早世し、二女のトラが事実上の長女であったということであろうか。

⁴⁴ 戸籍による。

⁴⁵ 2018年1月1日現在の人口は、19万2,116人。「小田原市ホームページ」「小田原市の人口と世帯 統計月報」。

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp/municipality/statistics/m-report/new.html>（2018年1月28日最終アクセス）

⁴⁶ 太田俊郎「小田原・ロシア正教事始」『おだわら—歴史と文化—』第11号、1998年、56頁。

こうした宣教の前哨基地となる小田原宣教に先鞭をつけたのは、ロシア正教であった。1877年（明治10）4月に2人、5月に33人が洗礼を受けて⁴⁷、小田原に日本人ロシア正教徒の共同体が形成されたのである。

カトリック教会はそれを追うようにして、1878年（明治11）に小田原での宣教活動に着手するが、その先陣を切って派遣されたのが、細渕重教夫妻であった。細渕重教の小田原での活動として分かっているのは、小田原とその近郊の村々でカトリックについての「講義」や「会合」を開いたことである。テストヴィド神父が1878年（明治11）10月に書いた書簡に「彼（引用者注：ロシア正教の信徒となった日本人男性）の村で、小田原のカテキスタの主催した会合があり、11人から13人が参加しました。3人がすでに洗礼を受けました。ほかの2人は近日中に洗礼を受けるはずです」⁴⁸とあるが、この「小田原のカテキスタ」が細渕重教である。

1879年（明治12）、テストヴィド神父は正式に神奈川県全域の巡回宣教師としての活動を開始した⁴⁹。その際、神父は「神奈川県を4分割し、それぞれを1人のカテキスタに任せ、絶えず順番に巡回」⁵⁰することとした。分割された四つの地域とは、横浜、横須賀、小田原、八王子で、神父の狙いは「4人のカテキスタがそれぞれ居を構えた近隣をすべて巡回し、思う存分活動すること」に置かれていた⁵¹。かくして、細渕重教に小田原とその近隣を「すべて巡回し思う存分活動すること」が託された。

「巡回宣教師」テストヴィド神父の宣教活動のために細渕がまず着手したのは、宣教のための拠点となる場所を確保することであった。彼は「仏人テツトウ井ト門徒」として、1879年（明治12）1月に、「小田原駅十字壺町目第六拾

⁴⁷ 小田原ハリストス正教会『小田原ハリストス正教会百二十年史』小田原ハリストス正教会、2002年、31頁。

⁴⁸ 中島昭子『明治の東海道を歩いた宣教師 テストヴィド神父書簡集』ドン・ボスコ社、2017年、53頁。

⁴⁹ 拙稿前掲「『巡回宣教師』テストヴィド神父の宣教活動」（註1）、117頁。

⁵⁰ 1879年3月26日付地区顧問宛書簡。中島前掲『テストヴィド神父書簡集』（註48）、57頁。

⁵¹ 同上。

四番地内田鉄次郎宅」で「天主教伝道仕度」と願う「御届書」を「山中孝」⁵²と連名で提出⁵³し、足袋屋の内田鉄次郎宅を布教所とした⁵⁴。

細渕は先述したように、神父が巡回を開始する一年前からこの地域で宣教活動を開始し、司祭のために予め「耕す」仕事を行っていた。その結果、布教所開設から3か月後の1879年（明治12）4月に、14人の受洗⁵⁵という実りを得た。ついで1880年（明治13）1月には12人、5月には13人が洗礼を受けたが、男性受洗者の代父には「細渕源一郎」が、女性受洗者の代母には「細渕トラ」がなった⁵⁶。この小田原の受洗者数について、パリ外国宣教会の『年次報告』（1880年）は「他の所では新信者の数が著しく増えた。小田原を例にとれば倍増であった。」⁵⁷と記している

しかし、信者の急増により内山宅は非常に手狭になったため、布教所は移転を余儀なくされ、1881年（明治14）頃、緑町にあった武家屋敷に移転した⁵⁸。その家について、テストヴィド神父は「（前略）最初の地点〔小田原〕では、所有地は1か所だけです。そこにカテキスタの住居と仮のチャペルを整える計画です」⁵⁹と書いており、細渕一家（この時点で一男二女の子供がいた）は緑町の布教所の敷地内に住んだと思われる。

この小田原に生まれた信徒グループは、司祭の巡回が無い「毎日曜日及び祝日等には一同会場に集まりて祈禱を行ひ、只管主日を守」っているとテストヴ

⁵² 「御届書」の署名部分に「神奈川県士族」として細渕と連名となっているため、細渕と同様に士族出身の伝道士と推測されるが、詳細は不明。

⁵³ 片岡永左衛門編著『小田原市立図書館郷土資料集成2 明治小田原町誌（復刻版）中』小田原市立図書館、1975年、8頁。

⁵⁴ 小田原カトリック教会百年祭実行委員会『小田原カトリック教会百年誌 1879～1979』小田原カトリック教会、1979年、17頁。

⁵⁵ 同上、18頁。

⁵⁶ 同上。

⁵⁷ 松村菅和・女子カルメル修道会共訳『パリ外国宣教会年次報告』第1巻、聖母の騎士社、1996年、59頁。（以下、『年次報告』と略記。）

⁵⁸ 前掲『小田原カトリック教会百年誌』（註54）、18頁。

⁵⁹ 1882年2月3日付書簡（宛先者不明）。中島前掲『テストヴィド神父書簡集』（註48）、70頁。

イド神父の「巡回報告」(1882年)に記されている⁶⁰。ここから、伝道士の細渕重教とトラが、司祭不在の間も信者たちを指導し、集会を行って信仰を養うことに心を遣っていたことが分かる。

以上の小田原時代の細渕重教に関する僅かな史料を通して、小田原の宣教を細渕に任せていたテストヴィド神父は、彼に信頼を置いていたらしいことが伺える。当時、細渕重教もテストヴィド神父も20代後半から30代前半という年齢で、年もさほど離れておらず(神父は1849年生まれ、細渕は1852年生まれ)、宣教地の日本で「巡回宣教師」という新たな使命に打ち込んでいた神父と、伝道士という新しい仕事に尽力していた細渕は、同じ志に燃える良いチームだったのではあるまいか。

細渕重教はその後、1883年(明治16)6月から1887年(明治20)7月まで横浜⁶¹で、次に1887年(明治20)8月から1889年(明治22)3月まで同じ神奈川県「三浦郡横須賀市」で、「布教傳導」に携わった⁶²。横浜・横須賀時代の細渕の活動に関しては不明である。わずかに分かっているのは、横浜において奉職中の1883年(明治16)10月28日に、横須賀市字稻荷谷に建てられた聖ルイ聖堂⁶³の「開堂式」で細渕(「^{アンドレア}安徳助亜細渕」⁶⁴)が祝辞を述べたということの

⁶⁰ 前掲『小田原カトリック教会百年誌』(註54), 18頁。

⁶¹ 「履歴書」には「横濱ニ於テ」「布教傳導ス」とあるのみで、彼が働いていたのが、横浜聖心教会かどうかは明確でない。横浜聖心教会所属の形の「講義所」等で働いていた可能性もある。

⁶² 「履歴書」(註10)による。

⁶³ 従来、聖ルイ聖堂は横須賀海軍造船所の敷地内に、フランス人技師やその家族のために1867年に建てられた聖堂兼小学校であったが、1880年(明治13)、フランス人たちが全員引き揚げた際に一度は閉鎖された。しかし、1882年(明治15)にテストヴィド神父が三浦郡中里村稻荷谷の山林を入手し、翌年献堂して復活させた。現在は横須賀市稲岡町に移転し、横須賀三笠教会と呼ばれる。横浜教区設立50周年記念誌編集委員会編『横浜教区設立50周年記念誌』カトリック横浜司教区、1988年、293頁、および高木一雄「外国人居留地とキリスト教9」『聖母の騎士』2002年2月号。

<http://www.seibonokishi-sha.or.jp/kishis/kis0202/kifrm.htm> (2018年1月20日最終アクセス)

⁶⁴ 「教會記事 武州横須賀ノ聖堂開ク」『公教萬報』第61号(1883年11月), 1頁。

みである。(1887年から細渕が「布教傳導」していた横須賀市の場所とは、この聖ルイ聖堂と思われるが、断言はできない。)

いずれにせよ、横浜の聖心教会はテストヴィド神父の巡回旅行の出発、帰還および休息の場所であり、横須賀の聖ルイ教会はテストヴィド神父が巡回を担当していた教会⁶⁵なので、1880年代を通して細渕重教とテストヴィド神父の関係は続いたのではないかと推測される。

2. 3. 名古屋・豊橋から麻布教会, そして「失踪」

「履歴書」によれば、細渕重教は1889年(明治22)4月から名古屋市および豊橋市で伝道士として活動している。この唐突な神奈川県から愛知県への移動の理由は、1887年(明治20)に名古屋の常住司祭となったテュルパン神父の宣教活動が引き起こした問題と関係があるのではないかと、筆者は考えている。

常住神父がいなかった名古屋・岐阜地区で、中心的な役割を長く果たしていたのは、伝道士の井上秀斉であった。しかし、井上や他の信者たちは、年に一・二度しかこの地区に神父が巡回しない状態⁶⁶を憂い、司祭が一人この地域に定住すべきと考えて、エブラール神父(名古屋・岐阜地区の巡回担当司祭)を通してそのことをオズーフ司教に訴えた⁶⁷。オズーフ司教自身も、1885年(明治18)に岐阜を訪問した際にその問題を痛感し、1886年(明治19)にテュルパン神父を名古屋・岐阜地区の宣教担当司祭として任命した⁶⁸。

ところが、東北から赴任してきたテュルパン神父は、まず岐阜に着任し、井上秀斉に伴われて名古屋・岐阜地方を見て回った後、地域が広大すぎるという理由で、大垣、高須、土岐の3拠点を閉鎖し名古屋市の宣教に集中する方針を出した⁶⁹。井上秀斉はこの計画に強く反対したが、神父は計画を強行し、1888年

⁶⁵ 『年次報告』第1巻(註57), 95頁。

⁶⁶ 青山前掲「明治のカトリック愛知・岐阜県布教(3)」(註2), 457頁。

⁶⁷ 青山前掲「明治のカトリック愛知・岐阜県布教(4)」(註2), 519頁。

⁶⁸ 同上。

⁶⁹ 同上, 520頁。

(明治 21), 主税町の士族屋敷を井上の名義で購入し教会に改造⁷⁰, ついで, 教会の敷地内に小学校(「啓蒙小学校」)を建設し始め⁷¹, さらに老人ホーム建設計画を立てた⁷²。

それまで井上秀齊は, 少人数でもカトリック信徒たちが「町村ごとに心を一つにして団結し, 巡回布教者を通じて他の町村の同志とも自由にまた自主的に協力」⁷³する雰囲気の中で活動し, またエブラール神父が思うように巡回できないときは, 南緯代牧区に属する京都のヴィリヨン神父に巡回を依頼するなど, 司祭に対し自主的で「能動的関わり方」をしていた⁷⁴。それだけに, 豊富な資金力を背景に自分の計画を強行するテュルパン神父のやり方, いうなれば司祭中心主義的なあり方に井上は苦しみ, 神父との意見対立に悩んだ末, 1889年(明治 22)に伝道士の職を辞して宣教活動から完全に去った⁷⁵。

こうして名古屋地区は井上秀齊の後任が必要となったわけだが, 有力な伝道士だった井上の後を継ぐ者は, 相応の力量を持つ伝道士でなければ務まらない。そこで, 細渕重教が井上辞任の穴を埋めるために, 急遽, 横須賀から名古屋に呼ばれたのではなかろうか。

しかし, 伝道士を信頼してかなり自主的な活動を許したテストヴィド神父のやり方に対し, 上記のように司祭が主導権を握り, 伝道士は完全に補佐役であることを求めるテュルパン神父のやり方は, 細渕重教にとっても合わなかったのではないか。中部地方にいたわずか一年半ほどの間, 細渕は名古屋の伝道士というよりも豊橋の伝道士⁷⁶として, 引き続き東京から巡回に来て三河地方の

⁷⁰ 同上。

⁷¹ 同上 522～523 頁。

⁷² 同上 523 頁。

⁷³ 同上。

⁷⁴ 同上。

⁷⁵ 同上 524 頁。

⁷⁶ 重教の長男である細渕重正の尋常小学校修了書は, 1890年(明治 23)3月25日に愛知県渥美郡豊橋小学校が出していることから, 細渕一家は名古屋ではなく豊橋に居住していたと推測される。

宣教を担当していたエブラール神父と共に働いている⁷⁷。そして、1890年（明治23）11月からは東京・麻布教会で働き始めた⁷⁸。麻布教会は、同年7月に小さな木造聖堂の献堂式が行われた⁷⁹ばかりの新しい教会であった。

細渕重教は、この教会で1890年（明治23）11月から1893年（明治26）11月頃まで働いた。しかし、彼がいた3年の間、麻布教会の主任司祭は目まぐるしく変わり、安定性を欠いた。細渕が赴任した時、初代主任司祭のパピノ神父は神田教会から巡回し、麻布教会には居住していなかった。1891年（明治24）から92年（明治25）2月まで主任司祭を務めたのはエブラール神父だが、彼も同じく神田教会から巡回した。初めて麻布教会司祭館に住んだ主任司祭は、1892年（明治25）3月に赴任してきたレゼー神父である。しかし、神父は同年11月に甲府・松本地方に転任してしまった。そして、レゼー神父の後任としてシュテル神父が来たが、彼も1893年（明治26）9月頃に麻布教会を去った⁸⁰。

そして、第5代の主任司祭となるギュイヨン神父が1893年（明治26）12月に着任する前の11月に、細渕重教は麻布教会の伝道士を辞め、一家はいずこかに去ってしまったのである。

ギュイヨン神父の報告には「次々と宣教師が替わり又伝道師（ママ）もいなくなった」⁸¹とあるが、「伝道師もいなくなった」と訳されている部分の原文は「à la disparition d'un catéchiste」であり、単に「いなくなった」というより、失踪、行方不明というニュアンスのある単語が使われている⁸²。

この時、41歳の細渕重教には7人の子供（三男四女）がいた。そして、麻布

⁷⁷ 青山玄「明治のカトリック愛知・岐阜県布教（6）」『The Missionary Bulletin』第25巻第11号，1971年，658頁。

⁷⁸ 「履歴書」による。

⁷⁹ 青山玄「明治期の麻布教会史」カトリック麻布教会百年史編集委員会編『カトリック麻布教会 1889年-1989年』カトリック麻布教会，1990年，30頁。

⁸⁰ シュテル神父は、翌年フランスに帰国し、パリ外国宣教会を退会してトラピスト修道院に入った。同上，37頁。

⁸¹ 『年次報告』第2巻，1997年，8頁。

⁸² 青山玄はこの個所を「一人のカテキスタの失踪」と訳している。青山前掲「明治期の麻布教会」（註79），38頁。

教会は一時的に主任司祭が不在で、伝道士を必要とする状態にあった。従って、「失踪」は細渕の衝動的な行動などでは決してなく、熟慮の末の、相当の覚悟あつての決断と思われる。この時、細渕重教は井上秀斉同様、伝道士という生き方をやめるつもりだったのではなかろうか。では、一体なぜ、彼は17年間続けてきた伝道士をこの時期にやめようとしたのか。

青山玄は、その理由を第一ヴァチカン公会議（1869～1870年）の精神が日本の教会に導入されたことに求めている⁸³。第一ヴァチカン公会議の決定が日本の教会に導入されたのは、公会議から20年後の1890年（明治23）で、長崎で開かれた「日韓合同教会会議」においてである。これ以降、それまでの伝道士や信徒に大きな自由と自主性を認めていたあり方は許されなくなり、日本のカトリック教会は、教会でのミサ出席重視や受洗までの長い教理学習などが要求される、教皇・司祭中心主義の教会へと転換していった⁸⁴。青山は、知識人向けの雑誌を刊行するなど進歩的なレゼー神父が、知識人の多い東京から甲府・松本地方に異動となったことも、上記の教会の変化を示すものと捉えている⁸⁵。そして、こうした諸々の変化を見た結果、「上からのこのような引き締めに対する先行き不安と不満とが嵩じ」て、細渕は「失踪」したのではないか⁸⁶、と考察している。

筆者は、この青山の考察を妥当と考える。そこに加えるとすれば、先述したように、細渕は既に名古屋で司祭中心主義のテュルパン神父のやり方を体験し、それまで自分たちが作り上げてきた伝道士のあり方が否定されることへの怒りや不満を味わっていた。その体験があつたが故に、なおさら望まぬ方向へと進んでいく日本の教会の変化の中で、彼は今後の伝道士としての活動の方向性を喪失し、伝道士としてのアイデンティティの危機に直面して、伝道士をやめようと「失踪」したのではなかろうか。

⁸³ 同上、38～39頁。

⁸⁴ 青山玄「明治二十三年のカトリック日韓合同教会会議の性格」『宗教研究』第52巻第三輯 1979年 149～150頁。

⁸⁵ 青山前掲「明治期の麻布教会史」（註79）、33～35頁。

⁸⁶ 同上、38～39頁。

3. 伝道士としての活動（2）：1896年の「再出発」から1931年の死去まで

3. 1. 北海道時代

麻布教会から「失踪」後の2年間、細渕重教がどこで何をしていたかは不明である。彼の「履歴書」には、1896年（明治29）から北海道函館および上磯郡谷好村にて、伝道士として宣教活動に携わったとのみ記されている⁸⁷。我々に分かるのは、彼が再び伝道士として生きることを選び、東京教区ではなく、函館教区の伝道士として「再出発」を果たしたという事実だけである。

ところで、細渕重教の北海道滞在に関して、一つ興味深いことがある。

細渕重教が北海道で伝道士として再び働き始めた同じ年の10月、トラピスト修道士9名が渡島当別に到着し、11月にトラピスト男子修道院の開院式が行われた。翌1897年（明治30）に「灯台の聖母修道院」と命名された⁸⁸この修道院は、1898年（明治31）、最初の日本人入会者4人を迎えたが、この4人の中に、細渕重教の義父である渡辺喜平がいた。渡辺喜平は57歳でトラピストに入会⁸⁹し、同年7月12日に「ヨワキム」の修道名で着衣した。その後、盛式誓願を1910年（明治43）5月15日に立て、その翌年11月9日にトラピスト修道院で死去している（享年70歳）⁹⁰。

渡辺喜平が来日したばかりのトラピストに入会した経緯は不詳だが、筆者は細渕重教が何らかの形で関わったのではないかと考えている。

トラピスト修道院がある渡島当別と細渕が伝道士として住んでいた上磯郡谷好村は、ともに函館湾に面し函館の対岸地域にあり、地理的に近接している。また、細渕重教の長男である細渕重正が函館の尋常中学校に在学した期間が、1898年（明治31）1月から7月までとなっている⁹¹ので、それ以前の1896年

⁸⁷ 「全貳拾九年 北海道函館區及ビ渡島国上磯郡谷好村教會ニ於テ傳導布教ス」。

⁸⁸ 『当別トラピスト修道院百周年記念』灯台の聖母トラピスト修道院、1996年、1～3頁。

⁸⁹ 渡辺喜平は、入会前、教会でコックの仕事をしていた。妻とは入会前に死別している。これらの情報は当別トラピスト修道院・高橋重幸神父の渡辺喜平に関するメモ（Sr.細渕ふみ子氏所蔵）による。

⁹⁰ 同上。

⁹¹ 函館巴学校の「明治31年10月4日」付「証明書」（細渕誠一氏所蔵）。

(明治 29) から 97 年 (明治 30), ちょうどトラピスト修道院が開院し定着していく時期, 細渕重教とその一家は谷好村に居住していた可能性がある。もしそうであれば, 細渕重教は谷好村の近くに新たに誕生したトラピスト修道院に関する情報を, ごく早い段階で義父の渡辺喜平に伝え, その入会に何らかの形で関わったという推測が成り立つのではなかろうか。

3. 2. 大河原町・金ヶ瀬・仙南地方

3. 2. 1. 大河原町での宣教

宮城県柴田郡大河原町にカトリック教会が誕生するきっかけは, 1881 年 (明治 14) 2 月に大河原の大泉徳治 (後に^{はじめ}一と改名。受洗時 19 歳) が仙台の元小路教会で洗礼を受けたことであった⁹²。同年, 鈴木安蔵一家も受洗し, 翌 1883 年 (明治 16) には 15 歳の大泉福治 (大泉徳治の弟) が, さらにその翌年には大泉徳治の子である大泉徳二郎 (2 歳), 大泉よしえ (4 歳) と鈴木安蔵の子の鈴木いえ (1 歳) が洗礼を受けた⁹³。こうして, 大泉家と鈴木家を核として大河原に小さな信者共同体が形成された⁹⁴。1885 年 (明治 18) にパリ外国宣教会はこの共同体について, 「仙台の南の大河原 (Ogowara) につくられた新しい信者共同体は有望である」⁹⁵と報告している。また, 永野の平間三郎の受洗 (1883 年) や曲竹の我妻一家の受洗 (1885 年) などがあり, 大河原町近郊にもカトリック信者が散在し始めた。

しかし, 仙台の元寺小路教会から大河原まで徒歩しか交通手段がなかった時

⁹² 大泉徳治受洗の前年, 元寺小路教会で大河原出身の Kikuchi Keizo という 21 歳の青年が受洗しているが, 受洗後にこの人物は福島に移住したことが洗礼台帳の欄外に記されており, 大河原とは関係がなかったと思われるため省いた。前掲『神とともに』(註 10), 53 頁。

⁹³ 同上, 49, 54 頁。

⁹⁴ 元寺小路教会の伝道士を務めていた小川昇之進の回想では, 「大河原の信者は大泉甚吉兄弟の青年に, 人力車夫夫婦, (その) 三才位の女の子, それから漢方医の坊主医者 of 六人だけ」とされている。前掲『小川昇之進伝道回想録』(註 15), 27 頁。

⁹⁵ 『年次報告』第 1 巻 (註 57), 107 頁。

代、司祭が大河原（とその周辺）を巡回することは稀⁹⁶であった（当時、大河原は元小路教会の巡回地⁹⁷）。その事情が変化したのは 1893 年（明治 26）のことである。この年、元寺小路教会主任司祭としてジャック神父が着任した。神父は、既に 1887 年（明治 20）に塩竈まで開通・開業していた東北本線を利用して大河原を訪れ、大泉徳治の父である大泉徳四郎の家でミサを捧げ、教理を教え、洗礼を授けた。そこから神父はさらに永野まで足を延ばし、そこでもミサを捧げた⁹⁸。

このジャック神父が、「大河原の伝道を重視して、伝道士を大河原に常住させることにし、1898 年（明治 31 年）11 月、細渕重教（48 歳）を伝道士として、函館から大河原に招」⁹⁹いたのである。（ジャック神父がどのような経緯で細渕を知り、函館から大河原に招くに至ったのか、また、それ以前の両者の関係がどのようなものであったかについては不明）。

細渕重教は当初、「本町の某家を借りて」¹⁰⁰「大河原町天主公教会講義所」¹⁰¹を開いていた。その後、細渕一家は上町の通称さとうや（佐藤屋）横丁にあった借家（大河原町字大河原 54 番地。現・大河原字町 202 番地）に移った。そして 1902 年（明治 35）、この家の二階¹⁰²が正式に「大河原天主公教会」（信者数 140 人¹⁰³）となった¹⁰⁴。

⁹⁶ 小野忠亮編著『北日本カトリック教会史 人物・教会・遺跡』中央出版社、1970 年、195～196 頁、および前掲『神とともに』（註 10）、56 頁。

⁹⁷ 宮城県カトリック教会百年のあゆみ記念事業委員会『宮城県カトリック教会 百年のあゆみ』カトリック元寺小路教会、1981 年、215 頁。

⁹⁸ 前掲『神とともに』（註 10）、56 頁。

⁹⁹ 前掲『宮城県カトリック教会 百年のあゆみ』（註 98）、217 頁。

¹⁰⁰ 同上。

¹⁰¹ 「履歴書」に「全三拾壹年ヨリ宮城県柴田郡大河原町天主公教会講義所ニ於テ傳導布教ス」とある。

¹⁰² 前掲『神とともに』（註 10）、57 頁。

¹⁰³ 「教會所設立ノ件ニ付伺按」（明治 36 年 2 月 12 日付）中に、「本教會ニ屬スル信者トナルヘキ者ノ数ハ百四十人」とある。前掲『仙台白百合学園歴史資料集』（註 10）、218 頁。

¹⁰⁴ 「教會所設立願」（明治 35 年 11 月 9 日受理）による。同上（註 10）、215 頁。なお、『年次報告』には、「宮城一『大河原の共同体はいつでも増え続けている』とエルヴェ師は書いている。彼はこの大勢の新しい信者たちのところに宣教師が一人ずついること

大河原天主公教会が生まれて二年後の1904年（明治37）に日露戦争が始まると、日本人ロシア正教徒たちは周囲より敵視され迫害を受けたが¹⁰⁵、その敵意はロシア正教に留まらなかった。特に、3. 2. 2で後述するように、当時の日本における対フランス感情は悪く、カトリック教会にとっても苦しい時期であった。

大河原町のある宮城県でも、「仏僧たちは、本軍の勝利の為の祈りをするという口実のもと、5, 6名ずつ組んで、地方をかけめぐって（中略）キリスト信者がいると知っているところでの彼らの祈りへの勧告は、特にキリスト教を毒づくことにある」という状況となった。そして、大河原近くの永野では、信徒たちが「自費でつつましい祈祷所を建てたところ（中略）『キリストの弟子たちの野蛮行為に敵対する人類の使徒』を自称している人々」がやってきて、彼らが寺で行う「キリスト教に対する戦い」と題する法話に、信徒たちも列席するように求める¹⁰⁶、という出来事が起こった。

こうしたカトリック信者には厳しい雰囲気の中で、細淵重教は、日露戦争に出征していた長男の重正（陸軍歩兵軍曹）の戦死（1904年10月11日に沙河会戦にて¹⁰⁷）という通知を受けたのである。この時、細淵は寺から長男の墓を作ることを拒まれるという辛い体験をした。また同年、別の信者の葬儀でも、埋葬のために行列が寺に近づいた時、突然寺の山門が閉じられて立ち往生する出来事があった。こうしたことから、ジャック神父、細淵重教、大泉一らが協力して、カトリック信者のための墓地を安浄寺に確保することとなった¹⁰⁸。

が出来ればとどれ程望んでいるか分からない。この人たちは自分たちの宗教に非常に愛着を抱いているが、まだまだ勉強が不十分だからである。」と述べられている。『年次報告』第3巻、1998年、36頁。

¹⁰⁵ 中村健之助『ニコライ—価値があるのは、他を憐れむ心だけだ—』ミネルヴァ書房、2013年、282～283頁。

¹⁰⁶ 『年次報告』第3巻、92頁。

¹⁰⁷ 細川誠一氏所蔵の、愛国婦人会からの通知書、および執筆者・執筆年不明の「故陸軍歩兵軍曹勲七等功七級 細淵重正氏」に基づく。

¹⁰⁸ 細淵このゑ「金ヶ瀬天主公教教会の思い出」、前掲『神とともに』（註10）、77頁、および57頁。

3. 2. 2. 大凶作と集団改宗

翌 1905 年（明治 38）、宮城県は長雨と冷夏のため、8 割以上の減収¹⁰⁹という大凶作となり、宮城県の総人口 89 万 9 千人余¹¹⁰のうち、救助を要する困窮者は 28 万 4 千人に上った¹¹¹。大河原町がある柴田郡でも、窮民数は 1 万 9196 人を数えたが、これは柴田郡総人口（3 万 7556 人）の半分以上¹¹²であり、翌 1906 年（明治 39）春には餓死者も出た¹¹³。

この緊急事態に対し、皇室からの救恤資金をはじめ、国の内外から義捐金が多額寄せられた¹¹⁴。宮城県も救済対策を進めたが、これに呼応する形で民間の中からも救済活動を目的とする団体が立ち上げられた。ジャック神父も元寺小路教会の主任司祭として、仙台にある各プロテスタント教会と救済活動で協力する一方¹¹⁵、カトリック独自の「公教凶作救済会」を作った。会の本部長は新谷雄三神父（元寺小路教会助任司祭）が務め、細渕重教が協力者を務めた¹¹⁶。

ジャック神父と細渕重教の宣教担当地区は柴田・刈田郡であったが、この地域の人々の大半は農民で凶作の影響は大きかった。柴田郡の困窮者数は先述したが、刈田郡も総人口 4 万 1818 人中、困窮者数は 1 万 9192 人に上っていた¹¹⁷。

ジャック神父はこの地域の農民たちの困窮状況を、

（前略）日本の東北地方において悪天候の後、収穫が全く無かったのである。

¹⁰⁹ 大泉如光『友情のマンナ』（私家版）、1976 年、3 頁。

¹¹⁰ 1905 年（明治 38）当時の人口。宮城県『宮城県凶荒誌 明治 38 年』宮城県、1916 年、191 頁。

¹¹¹ 同上、198 頁。

¹¹² 同上、192 頁。

¹¹³ 大河原町史編纂委員会編『大河原町史 通史編』ぎょうせい、1982 年、647 頁。

¹¹⁴ 前掲『宮城県凶荒誌』（註 110）、605 頁。

¹¹⁵ メソジスト教会のランベ牧師を委員長とし、仙台の外国人宣教師たちを委員とした在仙外国人凶作救済会は、プロテスタント各教派およびカトリック教会のジャック神父を委員としたキリスト教の団体で、エキュメニズム的観点から興味深い。ただ、カトリックとプロテスタント双方がどの程度協力関係にあったのかは不明。大泉前掲『友情のマンナ』（註 109）、5～10 頁。

¹¹⁶ 同上、12 頁。

¹¹⁷ 前掲『宮城県凶荒誌』（註 110）、192 頁。

既に戦争のために搾取された農民は生活のために残っていた家財道具迄売らねばならず、生活物資を得るために家屋を抵当にいれたりしてやがて無一物になる。貧民は木の実や蕨の根を取りに、木の皮を剥きに山に入った。このような物で胸のむかつくような食物を作ったのである。やがて、人々の記憶に無かった程の大雪が降り積り、このひどい食糧もやがて失われてしまった。数か村は外部とのあらゆる連絡が断たれたが、かつてない程の努力によって不幸な飢えた人々に食料の補給が行われたのである¹¹⁸。

と報告している。

1906年（明治39）1月22日、新谷神父と細渕重教は、カトリック教会が集めた救援物資を携えて刈田郡円田村、遠刈田村、柴田郡川崎村に向かった。目的は、それらの地域に住むカトリック信者の窮民を助けること、そして、現地の状況に応じて他の人々を助けることであった。二人は三日間で円田村の曲竹と永野、遠刈田村、川崎村を回り、窮民たちに米を配った¹¹⁹。

同年3月1日、『河北新報』に金ヶ瀬村の窮民の状況に関する記事が掲載されると、ジャック神父は、柴田郡で金ヶ瀬村だけが勅使一行の視察対象となったのは、その凶作被害が他所よりもひどいからではないかと推測し、細渕重教に調査を命じた¹²⁰。

そして細渕の調査報告を聞いたジャック神父は、即座に窮民救済を決定した。3月5日、新谷神父と細渕伝道士は寄贈米とともに金ヶ瀬村に向かい、56人の窮民たちに対して「天主公教有志団」からの寄贈米を配給した。この慈善行為がきっかけとなって、金ヶ瀬村の人々の中から、天主公教は「人助けの宗教」「ありがたい神様」と、自主的に改宗を望む者が続出した¹²¹。

そこで、細渕重教が彼らに教理を教え始めた矢先の4月、今度は金ヶ瀬村を

¹¹⁸ 『年次報告』第3巻、135～136頁。

¹¹⁹ 大泉前掲『友情のマンナ』（註109）、16～34頁、および新谷雄三郎「余の實見せる凶作地惨状の一斑」『聲』第351号 1906年1月、10～13頁。

¹²⁰ 大泉前掲『友情のマンナ』（註109）、46～48頁。

¹²¹ 同上、48～49頁、および前掲『神とともに』（註10）、61頁。

大火が襲った。そして、この火事の罹災者たちに対してもカトリック教会が救援活動を行うと、キリスト教は人助けの宗教との評判がより高まり、求道者はさらに増加して¹²²、1906年（明治39）にジャック神父は「128人の大人の洗礼を記録する喜びをえた」¹²³。そして、信者の急増により「彼らのために小さい祈祷所を建てねばならなくなり、その祝別の日には50人ほどの大人が」¹²⁴受洗した¹²⁵。また、1908年（明治41）春には75人が受洗した¹²⁶。以上を合計すると、この3年間の金ヶ瀬村の受洗者は約253人となる¹²⁷。なお、1908年（明治41）の洗礼式には函館教区長のベルリオーズ司教が臨席しており¹²⁸、金ヶ瀬村の集団改宗が函館教区にとって一大事だったことが分かる。

それだけでなく、この集団改宗の話はローマ教皇庁にまで達し、ローマ教皇庁布教聖省のランポラ枢機卿から一千円の寄付があった¹²⁹。函館教区は、その資金をもとに、1908年（明治41）、金ヶ瀬村大字平41番地（現・金ヶ瀬字町41番地）¹³⁰に聖堂を建設した。こうして、細淵重教とその家族はこの金ヶ瀬教会の敷地内に移り住み、教会と信徒の世話をすることとなった。

¹²² 大泉前掲『友情のマンナ』（註109）、50頁。

¹²³ 『年次報告』第3巻、172頁。

¹²⁴ 同上、173頁。

¹²⁵ 1907年（明治40）12月にジャック神父から提出された「教會所設立願ノ義ニ付副申」には、「已に信徒となりたるもの百三十六名にして信徒志願者二百名以上有之候猶向後布教次第にて千以上の信徒を得べき見込有之候」とあり、1907年（明治40）12月段階での金ヶ瀬村の信者数を136人としている。前掲『仙台白百合学園歴史資料集』（註10）、224頁。

¹²⁶ 細淵重崇「宮城通信 △陸前國柴田郡金ヶ瀬公教會」『聲』第390号（1908年5月）、44頁。

¹²⁷ ただし、金ヶ瀬村の集団改宗時の受洗者総数には、いくつかの異同がある。『神とともに』は、洗礼台帳によるとして、金ヶ瀬村での受洗者数は、1906年（明治39）が30人、1907年（明治40）が64人、1908年（明治41）が45人という数字を挙げ、受洗者数は合計139人とするが、『友情のマンナ』は、1906年（明治39）が32人、1907年（明治40）が92人、1908年（明治41）が78人で合計202人としている。いずれにせよ、金ヶ瀬村で3桁台の受洗者が短期間に誕生したことは間違いない。前掲『神とともに』（註10）、61頁、および大泉前掲『友情のマンナ』（註109）、51頁。

¹²⁸ 細淵重崇前掲「宮城通信」（註126）、44頁。

¹²⁹ 前掲『神とともに』（註10）、61頁。

¹³⁰ 「教會所設立願」。前掲『仙台白百合学園歴史資料集』（註10）、223頁。

大河原から移り住んだ細渕夫妻は、金ヶ瀬村に新たに生まれた信仰共同体の人々との関わり方は次のようなものであった。

(1) 当時、風呂のある家は少なかったので、信者たちは金ヶ瀬教会の風呂に入りに来て、そこで親睦を深めるのが楽しみだった。

(2) クリスマスや復活祭などの重要な祝日には、細渕重教は小学校に出向いて、信者の子供を早退させてくれるように頼み、学校もそれを許した。親たちは教会に集ってお祝いの食事を作り、早退した子供たちと共に祝った。

(3) 海外に移民した親戚に手紙を出したい人々は、外国語での宛名書きを細渕重教に依頼し、彼は常に快く引き受けていた。

(4) 細渕トラは農閑期の冬になると裁縫塾を開き、若い女性たちに縫物を教えると同時に、公教要理も話した¹³¹。

以上から、教会が信仰共同体の中心として機能し、細渕夫妻は深く信者たちと交わり、村人との間にも信頼関係を築くことが出来たことが伺える。

ところで、細渕重教は、仙南地域を担当するたった一人の伝道士として、金ヶ瀬村以外にも、永野、白川村、七日原などを回り、困窮する農民たちに救援物資や援助金を配っていた¹³²。その結果、永野¹³³では 1906 年（明治 39）に 15 人、1907 年（明治 40）に 23 人¹³⁴、1908 年（明治 41）に 15 人の計 53 人が、白川村では 1907 年（明治 40）に 24 人、1908 年（明治 41）に 38 人が、そして七日原では 1908 年（明治 41）に 18 人（『聲』では 20 人）¹³⁵が洗礼を受けた（七

¹³¹ 細渕このゑ前掲「金ヶ瀬天主公教教会の思い出」（註 108），76～77 頁。

¹³² 前掲『仙台白百合学園歴史資料集』（註 10），223 頁。

¹³³ 永野には、以前から小さいながらもカトリック信者の共同体があり、1902 年（明治 35）の『年次報告』にも「大河原から少し離れた所にある永野村は非常な好意を示している。ここの信者たちは目下、小さな祈祷所を建て、宣教師の為に足だまりを準備しようという計画を練っている」とある。そして 1905 年（明治 38），永野に「天主公教講義所」が開設し、1929 年（昭和 4）には教会堂が建設された。『年次報告』第 3 巻，36 頁，前掲『神とともに』（註 10），50 頁，前掲『宮城県カトリック教会 百年のあゆみ』（註 97），218 頁。

¹³⁴ 『年次報告』には、1906 年（明治 39）から 1907 年（明治 40）の永野での受洗者数を 20 人とある。『年次報告』第 3 巻，172 頁。

¹³⁵ 前掲『神とともに』（註 10），61 頁，および細渕重崇前掲「宮城通信」（註 126），44 頁。

日原は、全戸がカトリックとなった¹³⁶。

この集団改宗の波を見たジャック神父は、「宣教師は、地区の北部に送るための伝道師（ママ）をもっていなかったことを、非常に残念がっている。民衆はここでも同様によい心構えをもっていて、疑いもなく収穫は裕であったに違いない」¹³⁷と報告した。

このように、仙南地域の集団改宗にパリ外国宣教会と函館教区が強く反応したのは、1890年代から成人改宗者数が急激に低下し、カトリックの教勢が停滞状態に陥っていたからである¹³⁸。また、1895年（明治28）の三国干渉の後、日本人の対仏感情は悪化し、フランス人宣教師はスパイ扱いされ¹³⁹、日露戦争後のポーツマス条約に対する不満が爆発して日比谷焼き打ち事件が起こった時には、カトリック本所教会が焼き打ち対象となるなど¹⁴⁰、日本のカトリック教会には長く逆風が吹いていた¹⁴¹。従って、細渕重教が深く関わった仙南地域の集

¹³⁶ 七日原は、仙台市長も務めた早川智寛が始めた開拓事業によって生まれた、全部で13戸の小さな開拓民の集落であった。（細渕重教「仙台通信」『聲』第387号、1908年、48頁）。

1906年（明治39）の冷害で非常に窮乏した際、そのことを知った新谷神父と細渕重教が救援の食料をもって訪問したことがきっかけで、1907年（明治40）に最初の受洗者が生まれ、翌年には集落全員がカトリックになった。大泉前掲『友情のマンナ』（註109）、54～56頁。

なお、1908年（明治41）、七日原には、この集落に居た子供たち20余名のために「仮聖堂兼学校」が建てられた。そして、翌年には地主の早川智寛の協力とジャック神父の資金提供により、新たに「小さな仮聖堂、教室、宣教師のための足だまり、それに先生とその家族のための二室がある」家が建設された。しかし、この私立小学校は宮城県から公認を得られず、子供たちは遠刈田小学校に就学したため、建物は天主講義所として、巡回ミサが行われる場所となった。『聲』第406号、1909年、40頁、『年次報告』第3巻、226頁、前掲『仙台白百合学園歴史資料集』（註10）、279頁。

¹³⁷ 1907年（明治40）の報告。『年次報告』第3巻、172頁。

¹³⁸ 宣教師一人につき成人改宗者は、1900年（明治33）には9.9人と一桁にまで落ちていた。青山玄「明治期における日本のカトリック教会」ロジェ・オーベールほか（上智大学中世思想研究所編訳）『キリスト教史』第9巻、平凡社、1997年、455頁。

¹³⁹ 『年次報告』第2巻、52、85～89、91頁。

¹⁴⁰ 山梨淳「二十世紀初頭における転換期の日本カトリック教会—パリ外国宣教会と日本人カトリック者の関係を通して」『日本研究』44、2011年、224頁。

¹⁴¹ 時期は不明確だが、細渕重教の回顧によれば、（1）明治末期、柴田郡川崎村に行き、信者の葬儀の準備をしていたところ、暴漢に抜身の日本刀を振りかざして襲いかかられ、間一髪で難を逃れた、（2）大河原のある信徒の葬儀ミサの後、その人の先祖代々の墓が

団改宗は、当時のカトリック教会にとって大きな希望であり、この動きが継続することを強く願った。しかし、期待に反してこの動きは長続きせず、集団改宗の波はこの3年で終結したようである¹⁴²。

3. 2. 3. 伝道士としての細渕夫妻の働き

集団改宗の波が去った後も、細渕重教は伝道士として、ジャック神父と共に、大河原・金ヶ瀬を中心とする仙南地域の教会と、散在する信徒集団のために働き続けた。最も重要だったのは巡回ミサで、ジャック神父と細渕は、金ヶ瀬、宮村、永野、遠刈田、秋保と巡回し¹⁴³、七日原も定期的に訪問していた¹⁴⁴。

また、1915年(大正4)10月に大河原教会の聖堂が完成して主任司祭が常住し始めた後¹⁴⁵も、1923年(大正12)から一時的に司祭が不在となった際¹⁴⁶には、細渕重教が大河原教会の敷地内に住み¹⁴⁷、金ヶ瀬教会との間を徒歩で往復しながら、二つの教会の世話をした¹⁴⁸。細渕トラも、大河原教会でミサのない日曜日には祈りの先唱をして、信徒たちを祈らせており¹⁴⁹、夫妻で主任司祭のいな

ある寺に葬るために向かったが、山門に差し掛かったところで、突然、その山門を閉ざされた、(3)永野で、伝道所として使用していた宿で信徒たちの集会をしていると、嵐のような投石をされた等、彼自身、身に危険を感じる体験をいくつもしている。小野前掲『北日本カトリック教会史』(註96)、194頁。

¹⁴² 大河原教会の成人洗礼者もこの3年間だけは突出して多い。1906年(明治39)以前は、常に一桁台を推移し受洗者がいない年もあったが、1906年(明治39)は29人、1907年(明治40)は103人、1908年(明治41)は95人となっている。ところが、1909年(明治42)になると5人と激減し、以後、再び一桁の受洗者数が続く。前掲『神とともに』(註10)、49～40頁。

¹⁴³ 小野前掲『北日本カトリック教会』(註96)、194頁。

¹⁴⁴ 細渕誠一氏のご教示による。

¹⁴⁵ 大河原教会の初代主任司祭は、後に日本人初の司教となる早川久之助で、二代目司祭は、実弟で後に大邱三代司教となる早川久兵衛であった。

¹⁴⁶ 『年次報告』には、「イレネオ早坂師は病気のために妨げられて、二つの郡の中に散らばっている信者たちを以前はあれほどよく世話していたが、もうそのようにできなかった。人員不足で、彼の地区は現在主任がいない。そして、言うまでもなく、それは慣習通り、訪問を受けることのできない信者たちにとって大きな損失である」と記されている。『年次報告』第3巻、248頁。

¹⁴⁷ 前掲『神とともに』(註10)、66頁。

¹⁴⁸ 細渕このゑ前掲「金ヶ瀬天主教教会の思い出」(註108)、77頁。

¹⁴⁹ 前掲『神とともに』(註10)、66頁。

い教会を守っていたことが分かる。

この細渕トラは、夫を支えるだけでなく、先述の金ヶ瀬村での裁縫塾の例のように、自らも女性に対する伝道者として働いた。その点で興味深いのは、1919年（大正8）12月3日に永野で起こった「一つの信者共同体の婦人たちの霊的再生という出来事」¹⁵⁰におけるトラの働きである。30年ほど前に受洗した永野の女性信徒たちは、「のちに宗教教育を補うとの約束で、夫の保証と保護のもとに洗礼を受けることを許された」¹⁵¹だけで、読み書きも知らないため、キリスト教については最小限度の事しか知らなかった。それ故、宗教実践は男性のやることと考え、事実上信仰を離れた状態にあった¹⁵²。

この状況を憂えた大河原教会の早坂久兵衛神父は、「伝道師の妻の実に謙遜な愛想よさ、変わらぬ忍耐を目撃して（中略）一つの計画を立てた。すなわち、従うのを拒む年をとった婦人たちのところに、ヘレナ¹⁵³（これは、この善良な婦人信者の名）を滞在させて、彼女らを檻に連れ戻そう」¹⁵⁴と考えた。そして、「神の恵みによって、ヘレナは彼女たちに秘跡を受けるにふさわしい準備をさせ、聖フランシスコ・ザビエルの祝日には、堅信を受けるための用意ができた。実にこの日は、この辺鄙な村において真の祝いだった」¹⁵⁵という実りを得たのである。

村の女性たちへの働きかけは、男性である早坂神父にも細渕重教にも不可能で、女性である細渕トラにしかできないことであった。このように伝道士の仕事は重教一人で行っていたわけではなく、妻のトラも女性への宣教と教化においては重要な役割を担っていたのである。

おわりに

¹⁵⁰ 『年次報告』第4巻，1999年，169頁。

¹⁵¹ 同上。

¹⁵² 同上。

¹⁵³ 細渕トラの洗礼名。

¹⁵⁴ 『年次報告』第4巻，16頁。

¹⁵⁵ 同上，169～170頁。

1924年（大正13）、ベルリオーズ司教は

伝道師—1923年から1924年の年度には13人の伝道師の登録しかなかったが、現在では、その中の11人しか残っていない。しかも、付け加えて言うべきは、善意があっても彼らはその肩書に要求される役務をすべて果たすことはもう殆どできない。大半が昔の教育を受けた者、日本がまだ本来の姿を保っていたあの幸いな時代の人々なのである。そのために、彼らは今の時代と共感できないし、若者の側も彼らを少々…古くさいと思っている¹⁵⁶。

と『年次報告』に記した。この報告は、72歳の細渕重教が「善意があっても（中略）その肩書に要求される役務をすべて果たすことはもう殆どできない」、若者に不向きで時代遅れの伝道士の一人とみなされていたという、冷厳な事実を我々に告げている。

そして、函館教区は男性伝道士に代わって、「よく養成され、しっかりした規律を身につけ、聖座によって一時的に認可された一つの修道会のもとに実（ママ）を置いている」¹⁵⁷修道女たちに、「家庭訪問や、女性や子供たちに、その家に行って公教要理を教えること、すなわち信者としての生き方に触れるようなきざしが見られたなら、宣教師がすぐに行って、いやすことができるよう、彼女が宣教師と人々との橋渡しとなる」¹⁵⁸働きを行うことを期待するようになった。こうして、1920年代に函館教区では、伝道士が宣教活動において重要な役割を果たす時代は終焉を迎えたのである。

細渕重教は、1931年（昭和6）8月13日に大河原で帰天した。享年80歳。明治初期から日本のカトリック教会の軌跡を共に歩み、伝道士として生き抜いた生涯であった。

¹⁵⁶ 同上、266頁。

¹⁵⁷ 同上、267頁。

¹⁵⁸ 同上。

細渕の伝道士としての働きには、二つの要素があった。

一つは、非キリスト教徒の人々に対する福音宣教者としての働きである。1880年代、宣教師がたまにしか来ないという状況下で、細渕は司祭に代わって「説教会」や「講義」を行い、受洗の準備を行った。また、大河原をはじめとする仙南地方においても、細渕重教とトラは、公教要理の教授を通して宣教を続けた。

そして、こうした宣教活動を通じて信仰共同体が生まれると、第二の働きが生まれる。建設された教会の建物を守ると共に、司祭がいない間の信仰共同体の信仰を守り育て、教化するという役割である。

巡回地だった小田原、横須賀、あるいは巡回教会の時代が長かった大河原教会および金ヶ瀬教会において、司祭がおらずミサがないことはしばしばあった。そんな時、日曜・祝日に信徒たちを教会に集め、祈りを先唱し、彼らの信仰を涵養したのは、細渕重教とトラであった。

また、細渕重教は補佐役としてジャック神父の巡回ミサに同行し、講義所しかない、あるいは、それもなく少数の信徒がいるだけの地域に住む信徒たちを支えた。

キリシタン時代、インドにおけるカナカピレイ¹⁵⁹の役割・機能が、日本においては「パードレ等に同行して信者の教化と異教徒への宣教に従事する伝道士（説教師）」と、教会を管理して信者を教化する者（慈悲役者・坊主）」とに分かれ、前者が「同宿」、後者が「看坊」と呼ばれる存在となった¹⁶⁰。細渕重教の働きを通して見る近代日本の伝道士は、当初、同宿的機能と看坊的機能が混合したカナカピレイ的なものに近かったが、教会共同体が大きくなっていくにつれて、看坊的機能に重点が移ったように思われる。これは、巡回宣教師の活動が、当初は非キリスト教徒の日本人たちへの直接宣教が主だったのが、日本人信徒

¹⁵⁹ 「カナカピレイ」はインドのイエズス会士が組織した現地住民の宣教補助者で、パードレに同行して書記を勤め、村々でキリスト教要理を教えるカテキスタの役割を果たした上、教会の清掃と管理を行って、生活費と給料の支給を受けていた。五野井隆史「イエズス会非会員のコングレガサンと階層化」『史学雑誌』第103編第3号、1994年、37頁。

¹⁶⁰ 同上、38～39頁。

集団が形成されていくと、信徒への司牧活動が中心になっていく¹⁶¹のと同じ傾向と言えよう。

また、この変化の背景には、2. 3で先述した第一ヴァチカン公会議の影響もあると考えられるが、この点については別の機会に考察を深めることとした。

最後に、細渕重教の伝道士としての働きとして付け加えておきたいのは、彼は信者たちに霊的な支えだけでなく、物的な支えも与え助けていたということである。（おそらく、助けていた人々は信徒だけではないであろう。）

例えば、細渕の葬儀で読まれた「弔辞」で、細渕重教が1924年（大正13）に東京で開かれた全日本カトリック教徒大会で話し終って「降壇するや見知らぬ多くの若い人々は先生の前に集り来たって『貴男は細渕さんですか、私の親は色々と御世話さまに預りました。私は其の子供です』と皆んなが感謝の面をかべて老先生の手を握りぬめ」¹⁶²たことが述べられた。これは単に、大凶作の時に細渕が新谷神父と共に教会からの援助を配り歩いたことのみを指したものではないと思われる。というのは、次のようなエピソードが残っているからである。

長男の重正が戦死した後、細渕重教のもとに形見の時計2個が送り返されてきた。しかし、後に重教はその2つの時計を1円で売ってしまった。なぜそんな大事なものを売ったのかと問われた彼は、「『えーなにその』と淋しく笑いながら古風の鞆から血に染ったハンカチのみを出して見せ」¹⁶³た。その様子を見て、訊ねた人は泣いた。なぜなら「この老紳士は金がない時は身のまはりのものまで賣拂つて困る人に恵む平素をよく知ってゐるから」¹⁶⁴であった。細渕重教は、このように自らの身を切りながら、黙々と人々を助けていたのである。

細渕重教は無名の人である。しかし、その生涯はまさに「地の塩」と呼ぶに

¹⁶¹ 拙稿前掲「『巡回宣教師』テストヴィド神父の宣教活動」（註1），125頁。

¹⁶² 仙南公教同志会一同「弔辞」原稿（細渕誠一氏所蔵）。

¹⁶³ 前掲「故陸軍歩兵軍曹勲七等功七級 細渕重正氏」（註107）。

¹⁶⁴ 同上。

ふさわしく、日本カトリック教会史という織物における大切な一本の経糸であった。

末筆ながら、細渕重教のご遺族である、細渕誠一・弘子ご夫妻、Sr.細渕ふみ子氏（天使の聖母宣教修道女会）から、貴重なご教示と資料提供をいただきましたことを深く感謝し、心よりお礼申し上げます。